

# 「仲間外れ」を表わす方言の現状と伝播の様態

—— 地域差・年齢差の観点から ——

## A study of Japanese words related to “isolating a person” and the spread of dialect

—— from the Perspective of differences in area, age ——

梶 村 知 美\*

Tomomi Sugimura

### (要旨)

人をマイナス評価する「仲間外れ」を表わす言葉の方が、「仲間に入れる」を表す言葉より辞典類に多く採録されている。先行研究で「仲間外れ」に関する言葉の調査はなされているが、大学生のみを対象にアンケート調査したものであり、年齢差、地域差に言及して聞き取り調査されたものは見当たらない。

そこで本報告では、47都道府県49地域の老年層、中年層、若年層、少年層各年層10人以上に聞き取り調査を行った。「仲間外れ」を表わす方言の「ハミゴ」(はみ出した子)、「ハブ」(省くの省略)、「ハネ」(はねるの省略)といった言葉を中心に使用実態・伝播状況を調べた。ハネ類は西日本の広範囲で使用されていたが、現在は中国地方の中年層や老年層に使用範囲は狭まっている。少年層になると広島県や山口県にわずかに使用が見られる程度である。ハブ類は静岡県の方言として使用されていたものが、首都圏の若者に使用されることにより全国に「空からばらまかれたような伝播」で広がったことが明らかとなった。そのハブ類の伝播とは対照的に従来の「地をほうような伝播」で広がっているものがハミゴ類である。近畿地方の50歳代が学生時代に使用し始めたものが、大阪や兵庫を中心に近畿地方内に広がり、中国地方や四国地方など西に伝播していった。東海地方や北陸地方に広がっていない。今でも中国地方の伝播は広島県の東部から西部にも広がりつつある。また四国地方から海を渡り九州地方の大分県でも使用が多く瀬戸内海を軸として伝播している。

岐阜県愛知県で使用される「ハバ」もハブ類の伝播によってその使用は衰退傾向にある。青森県の「ハゴ」や秋田県の「ハツケ」のように、今なお多くの若い世代に使用され続けている地域もある。

ある地域では若者言葉のように使用されている「仲間外れ」を表わす言葉も、地域別年代別に調査を行うことにより、ある地方の地域方言だったものが若い世代を中心に浸透していく様子が明らかとなった。

## 1. はじめに

「村八分」という言葉が存在するように以前から子ども社会だけでなく、大人社会においても「仲間外れにする」行為は行われてき

た。「子どもの仲間集団の変容」について、田中(2002:65)は、「仲間集団の形態に関する親世代が子どもの頃(およそ1960年代)の仲間集団は、異年齢・異性の仲間を多く含む異質性の高い、規模の大きな集団であった。こ

\* 山口大学大学院東アジア研究科大学院生 (The Graduate School of East Asian Studies, Yamaguchi University)

れとは対照的に、子ども世代の仲間集団は、同年齢・同性で構成される同質的集団であって、その規模は小さくなっていることが分かる。特に仲間の同年齢化、同級生化の方向へ進んでいる」として、異年齢・異性の大規模集団ではなく、小規模の同質的集団を好む傾向にあることを指摘している。親世代では4人までの少人数集団は18.1%であったのに対し、子世代では82.0%となっている。その一方、子世代での多人数集団は減少している。田中（2002：70）は、「仲間集団における規則・規範を自分勝手に修正したり破棄する子どもに対しては、仲間はずしなど、何らかの制裁が加えられることになる」と述べている。小さな集団の中で「仲間はずし」に遭った子どもは行き場をなくしてしまうのである。

さらに住田（2001：86）では、「子どもの社会の個人主義的な私生活化現象は、仲間関係においては、浅薄化、縮小化、喪失化、断片化という、総じて仲間関係の希薄化現象となって結果する」と指摘している。自分と気の合わない仲間は排除し、また排除された子どもは個という空間の中で生きていこうとするようである。

また、「仲間に入れる」言葉に比べ「仲間外れにする」語の方が方言資料や辞典類に多く採録されており、人をマイナス評価する言葉は、地域や時代によりさまざまな言葉が作られ、使用されていたものと考えられる。近年は従来の人と人とが接することによって広がる所謂「地をはう」ような伝播と異なり、テレビ・ラジオに加え、インターネットによる所謂「空からばらまかれた」ような伝播も増えている<sup>1)</sup>。地域差に関係なく、一気に全国に言葉が伝播するケースである。特に、インターネットや携帯電話の普及により、以前と異なる形で対人コミュニケーションを取るようになり、それが伝播にも影響を与えている。

使用者がはっきりしている例をみると、東京の杉並区の学校長である藤原和博氏は『文藝春秋』（2006）の中で「携帯メールの返信が少しでも遅れると、無視がはじまるというようなことである」と述べている。無視や仲間外れを表わす意味として「ハブ」を用いている。

マスコミ関連の記事では、「ハブ」に関しては1993年12月12日朝日新聞朝刊東京本社版に見られる。東京都日野市の50歳代の女性は高校生の姪が会話で「ハブラレテイル子がいるのよ」と使用しているのを不思議な言葉だと記している。1997年2月24日発行の『アエラ』には「ハブるな 進研ゼミからいじめ本『学校で起こっていること』発刊」とタイトルを付けている。文学作品では『ナイフ』（1997）に、「一学期の期末試験を数日後に控えた七月初め、あたしは一夜にしてハブになった」と使われている。同年に発行された『いじめの時間』（1997：16）の中でも「誰かをハブにするとき以外は」と使用が見られる。

一方、大阪の中学校では、総合学習のテーマに「『夢バトン』～はみごのないまちづくり～」を掲げている。「仲間外れの人がいない」という意味で「はみご」と使っている。

このように使用例の差からも大きく関東と関西では使用される言葉が異なることを予測することができる。

そこで、本稿では「仲間外れ」を表わす言葉を取り上げて考察する。特に「仲間外れ」を表わすハミゴ類・ハブ類・ハネ類<sup>2)</sup>を中心に使用差の実態を地域差・年齢差の視点から着目したい。

## 2. 研究の目的

本報告では対人関係が複雑化する現在、「仲間外れ」の意味で使用される非標準語形がど

のような広がりを見せているのかに着目する。「仲間外れ」を表わす言葉の使用実態を地域差・年齢差の面から調査分析し、伝播状況、また言葉の価値意識を明らかにしていきたい。

### 3. 辞典・方言資料類の記述

「ハミゴ」は『日本国語大辞典第2版』（2001）や『日本方言大辞典』（1989）に記載されていない。最も古い記述の郡編（1997）は以下の通りである。

【ハミゴ】[5.6.6若] 仲間外れ

数字は17人の調査を行い、「自分で使う」5人、「知っているが自分では使わない」6人、「知らない」6人を表し、若年層に使用者が多いことを意味している。

ハブ類・ハネ類は『日本国語大辞典第2版』（2001）（以下『日国』とす）には下記のように記述されている。本稿では紙幅の都合上『日国』についてのみ扱う。

【はぶき】(省) 方言①村八分。仲間外れ。島根県八束郡・隠岐島 はぶけ 三重県志摩郡 はぶし 島根県平田市・隠岐島 はぶせ 静岡県静岡市・浜松市 はぶれ 静岡県庵原郡 はぶ 静岡県田方郡・安倍郡、島根県隠岐島

【はぶきもの】仲間から除かれた者。歌舞伎・忠臣いろは実記(清水一角) (1873) 「一人身共を嫌ひ、省き者にいたし居ったか」

【はぶく】④仲間から除く。仲間外れにする。滑稽本・八笑人(1820-49) 三・追加下「おいらも跡で連中をはぶかれても仕方がねへ」

方言 三重県志摩郡・島根県八束郡・隠岐島・山口県阿武郡

【はね】方言⑧仲間から外すこと。仲間外れ。のけ者。

三重県名賀郡・名張市・岡山県児島郡・広島県・山口県

【はねのける】拒絶する。のけものにする。浮世草子・諸道聴耳世間猿(1766)「陰口が悪いとて、近所の茶飲にさへはねのけられても」

【はねる】

方言⑥集落の交際を絶つ。仲間外れにする。高知県土佐郡。

文献では、「はぶきもの」の用例に挙げられている歌舞伎『忠臣いろは実記』は明治時代の作品で江戸生まれの河竹黙阿弥が著したものである。次に「はぶく」の用例では江戸生まれの滝亭鯉丈の滑稽本『八笑人』がある。江戸後期の作品であり「はぶきもの」「はぶく」という形で掲載されてあるが、方言レベルではない。

一方のハネ類は、「はねのける」という用法で「はぶきもの」より早く1766年に使われている。浮世草子『諸道聴耳世間猿』は大阪生まれの上田秋成の作品である。さらに古いものでは江戸中期に並木正三<sup>3)</sup>が著した作品『幼稚子敵討』(1753)に「こりゃ寄ってこつてわし一人をはねだしにするのぢゃの」(下線引用者)が記されている。

後述の図1に示すように、ハネ類は主に西部方言域での使われ、東京近辺での使用はない。江戸時代か文献での使用例は見られるが、使用例が少なく、ハネ類とハブ類の違いは証明しづらい。

また、出典を調べてみると、ハブ類は広戸惇・矢富熊一郎編(1963)『島根県方言辞典』、北岡四良編(1959)『三重県方言資料集』、内田武志編(1934)『静岡県方言集』、瀬川清子(1938)『見島聞書』に採録されている。1930年代の老年層には方言として使用されている

ことが分かる。

ハネ類は、北岡四良編（1959）『三重県方言資料集』、十河直樹編（1966）『児島地方の方言集』、広島県師範学校郷土資料室編（1933）『広島県方言の研究』、小都勇二（1959）『たかたのことば』、藤河喜美江（1934）『広島県安芸郡坂村方言集』、山中六彦（1967）『山口県方言辞典』、桂井和雄（1955）『土佐山民族誌』に見られる。ハネ類も1930年には方言としての使用が確認されている。しかし、今の老年層の祖父母世代、親世代にあたる言葉が収録されている可能性が高いので、今では当該地域で使用されていないことも考えられる。

以下の図1に『日本方言大辞典』を加えた、調査対象語の使用状況をまとめた。ただし、現在の老年層より先の年代の使用実態を示し、使用が辞典類に記されている地域を整理するため、使用が新しい郡編（1997）は図1から省く。

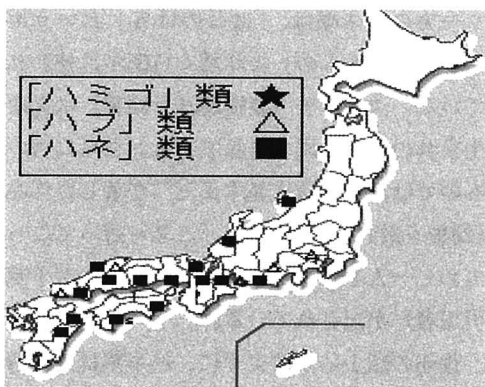


図1 辞典・方言資料類の記述による使用状況

西日本の広範囲にハネ類の使用があり、新潟県の佐渡から宮崎県まで使用が見られる。「ハブ」の使用は静岡県、三重県、鳥根県、山口各県に見られる。「ハミゴ」の使用例は見られない。辞典類（以下、方言資料類を含むものを略称する）の記述から、ハネ類が最も広く使用されていることが分かった。

## 4. 先行研究

### A 「四国言語地図」「西日本言語地図」

高橋氏は「ハミゴ」と「ハネ」について大学生中心に調査を行っている。

1990年に四国地方で「仲間はずれのことを『ハミゴ』。また、仲間はずれにすることを『ハミゴニスル』」というようです。あなたは、このことばを使ったことがありますか」という質問調査を行っている。四国域内に限ったものであるが、各県の分布をカウントしてみると、徳島県使用者は9.3%、高知県で使用8.1%、愛媛県で0.05%、香川県で0%と、四国全体をみてもほとんど使用されていない（cf. 高橋（1990））。

次に氏は2005年に「ハネ」の調査を行っている。前述の「ハミゴ」とは15年の差があり、調査もほぼ全国の大学生を網羅している。

「ハネ」の使用者が多い地域は広島県である。約7割の人は使用または認知している。次に多いのが鳥取県である。使用者は3割程度と広島県に比べると少ないが、使用または認知語彙である人は7割に達する。岡山県と山口県は使用者と認知者を合わせて約5割である。半数の人が「聞いたことがない」としている。鳥根県は使用者と認知者を合わせ25%で、中国地方の中では最も少ない。中国地方以外ではほとんど認知されておらず、使用者も少ない（cf. 高橋（2001-2005））。

### B 「キャンパスことば全国分布図」

永瀬氏は「仲間外れ」を表わす言葉を大学生を対象に調査し、キャンパスことば全国分布図を作成しそれに言及している（cf. 永瀬（1994））

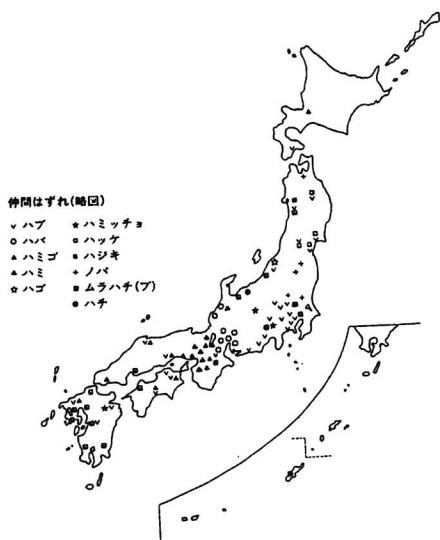


図2 『言語』(1994年6月号)より抜粋

調査対象語である「ハミゴ」「ハミ」「ハミッコ」をみると、「ハミゴ」は大阪府、兵庫県、京都府を中心に四国地方や鳥取県、福岡県で使用され、北海道のみ離れて使用されている。「ハミ」は石川県、滋賀県、和歌山県等で使用されている。「ハミッコ」は長野県、大分県と飛び火的に伝播している。次に「ハブ」を見ると首都圏を中心に全国的に見られる。「ハネ」の使用は示されていない。

同書で永瀬(1994:114)は、「ハブは首都圏で発生した新しい語形であろう」としている。また同書で「地方都市で新しい語形が生まれ、周辺に伝播している状態が読みとれる。東京都だけが情報の発信地になるのではなく、各地方都市が発信地になって新しい情報をその周辺に伝播している」と指摘している。

### C 『現代若者言葉考』

1994年に、米川氏が大阪の女子大生272名に調査したものがある。要約すると大学生は大阪を中心に近畿地方の出身者が大半を占める。

「はみ子」の使用率を( )内に示す。A:

よく使う(14.3%) B:ときどき使う(24.6%)  
C:知っている、または聞いたことがあるが使わない(29.1%) D:意味がわからない、または聞いたことがないので使わない(9.6%)  
E:以前使っていたが今は使わない(22.4%)であった。A・B・Eを合計すると61.3%となり、使用する、使用していた学生は過半数に達していた。Cの理解語彙である29.1%をこれに加えると、「はみ子」の認知度は90.4%に達する((cf. 米川(1996))。

### D 予備調査

以上の先行研究を踏まえ、2004年7月～12月に中国、四国、九州地方の大学生を中心に「仲間外れ」の言葉のうちハミゴ類のアンケート調査を行った。この梶村(2005)の第1次予備調査からハミゴ類は近畿・四国地方で使用と報告している<sup>4)</sup>。

次に2005年8月～9月に「方言WEBほべりぐ」サイト<sup>5)</sup>を用いた第2次予備調査では、「仲間外れ」を表わす言葉は地域によって言い方が多様であることが分かった。

山口、広島、福岡各県の大学生を中心に行った2007年7月の第3次予備調査では、ハミゴ類、ハブ類、ハネ類の3項目のアンケート調査を行った。ハミゴ類は兵庫、岡山、香川各県で多く、ハネ類は広島県、山口県、ハブ類は九州地方と、神奈川県で使用がみられた。

以上の先行研究は大学生を中心にアンケート調査したものである。そのため、管見の限り各々の地域で老年層や中年層が使用しているのか、また中学生・高校生など若い世代が使用しているのかまでは言及したものはない。

## 5. 考察

本節では使用実態を明らかにするために、

インターネット検索調査と、添付資料1を用いて日本全国の聞き取り調査を行い、分析する。

### 5-1 インターネット検索

聞き取り調査を行う前に、インターネット上ではどの程度使用されているのか調査を行った。「ハネ」は「羽」などが表示されることが多く、「はねる」は「飛び跳ねる」など共通語と一致する点が多く、人に対する「仲間外れ」のみを一語検索することは難しい。そこで「調査対象語+される」「調査対象語+する」の形で検索を行う。

2008年8月10日に検索エンジンgoogleを用いて「ハミゴにされる」を検索すると97件、「ハブにされる」546件、「ハネにされる」25件と、「ハブ」が圧倒的に使用が多いという結果になった。「ハミゴにする」44件、「ハブにする」544件、「ハネにする」6件と、被害的な立場からも加害的な立場からもハブ類が多く使用されていた。また、ハミゴ類とハネ類に関しては加害的な立場の使用になると激減している。

## 5-2 聞き取り調査

### 5-2-1 調査方法、調査対象者、調査時期

筆者は全国・全世代に対して直接聞き取り調査を行った。調査対象者は調査地域で育った、老年層（60歳代以上）、中年層（40・50歳代）、若年層（20・30歳代）、少年層（10歳代）の各年齢層10名以上である<sup>6)</sup>。各都道府県の主に各庁所在地を中心に実施した。有効回答者数2194人の調査結果である。一人一人に筆者が直接声をかけ、対面式での聞き取り調査を行った（添付資料2）。調査内容は後述の添付資料1を参照されたい。島根県と広島県は旧国名別に分けて調査した<sup>7)</sup>。調査時期は2007年8月～2008年8月である。

### 5-2-2 聞き取り調査結果

以下、聞き取り調査結果を年層別に示し、吟味したい。調査対象語は「ハミ」☆、「ハミゴ」★、「ハブ」△、「ハネ」□、「ハネコ」■で表す。調査対象語以外の回答のあった言葉については「ハバ」#、「ハゴ」\$、「ハツケ」◎、「ハンツケ」○、「ハツケ」●という記号で示す。使用率20%以上50%未満は記号を1つ、使用率50%以上は記号を2つ付している。

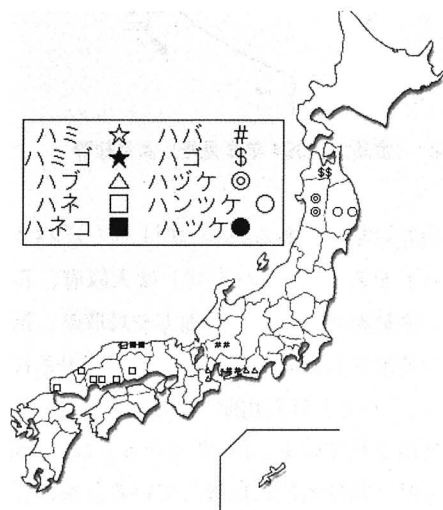


図3 老年層の使用状況

まず、老年層（図3）について見てみる。「ハネ」「ハネコ」などのハネ類は中国地方すべての県で使用されている。特に広島のア芸地方での使用が目立つ。「ハネコ」は鳥取県のみ使用が見られた。

ただ、辞典類記述で「ハブキ」などのハブ類の使用があった島根県出雲地方では「ハブ」の使用は見られず、今回の調査では認知者もいなかった。

同様にハネ類も図1の辞典類によれば、北陸、近畿、東海、四国、九州などでも使用があった。しかし、今回の調査でハネ類の使用を留めているのは、主に中国地方であることが明らかとなった。江戸時代にはハネ類は大阪

で使用されていたが、本調査ではハネ類は使われていなかった。おそらく老年層世代にはすでに使用されなくなったものと解釈する。

老年層のハブ類は、静岡県で「ハブセ」、三重県で「ハブケ」という語形で使用している人が多かった。静岡県では「ハブ」を用いる70歳代の使用者もいた。

「ハミ」「ハミゴ」などのハミゴ類はどの地域でも使用されていない。

その他に愛知県や岐阜県では「ハバ」が使用されていた。青森県では「ハンゴ」、秋田県では「ハツケ」である。「ハツケ」は「外せ」、「はじけ」等から「ハズケ」という表記も考えられる。岩手県では「ハンツケ」という言い方が使われている。

首都圏や四国地方、九州地方など調査対象語や「仲間外れにする」際の言葉一般の使用が見られない地域では、「仲間に入れ」の際に使用する言葉の否定形を使うという答えが多かった。例えば「まぜる」の否定形「まぜない」や、「かてる」の否定形「かてん」のような言い方である。また直接に「仲間外れ」の方言は見当たらないという回答が目立った。

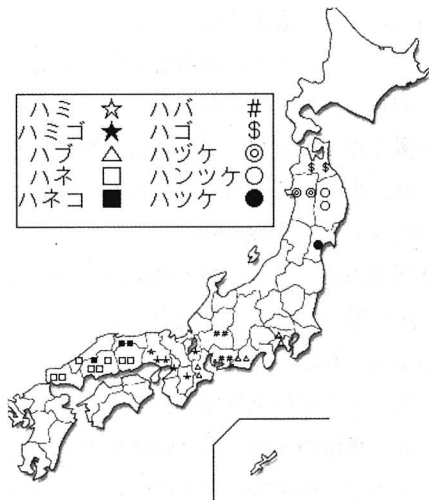


図4 中年層の使用状況

中年層（図4）になると、大阪、兵庫を中

心に近畿地方で、ハミゴ類の使用が見える。ハミゴ類は前述の『大阪府のことば』にも若年層での使用が多いことが示されており、比較的新しい言葉であることが分かる。

静岡県は「ハブセ」や三重県は「ハブケ」という言い方で用いる人が多かったが、東京都や神奈川県での「ハブ」という形で使用者が現れてくる。東京都などでは老年層に使用が見られず、中年層が学生であった時分に若者言葉として使用が始まった可能性が高い。

中国地方では老年層と同様にハネ類が使用されている。使用率は岡山や山口両県では増加傾向が目立っている。広島県安芸地方では鳥取県と同様に「ハネコ」の使用も見られた。

愛知県や岐阜県では老年層と同様に「ハバ」が使用されている。「ハバ」は長野県の一部の使用者は、両県から伝播したのではないかと思われる。

東北地方北部では老年層と同様に、青森県で「ハゴ」、秋田県で「ハツケ」、岩手県では「ハンツケにする」が用いられている。宮城県では新たに「ハツケにする」があった。永瀬（1994：114）は「ハツケは宮城県の新方言と関係するかもしれない」としている。老年層や辞典類にはみない新しい言い方である。

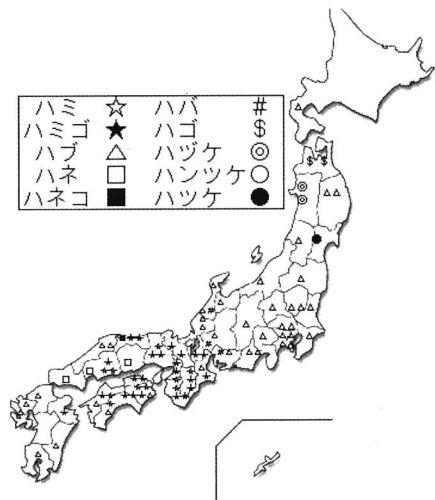


図5 若年層の使用状況

若年層（図5）になるとその際立った特徴は、中年層では、静岡県・神奈川県・東京都などで使用されていた「ハブ」が日本全国に広がっていることである。特に北海道から愛知県にかけて使用が多いことが分かる。九州地方にまで使用が見られる。東海地方では、中年層や老年層で使用されていた「ハバ」や「ハブセ」という言葉の他に、個人差があるが「ハブ」の使用者が現れている。

一方、中年層では近畿地方の一部に使用が見られたハミゴ類であるが、若年層になると、近畿地方でさらに使用者が拡大し増えている。四国地方や鳥取県、広島県東部にも「ハミゴ」の使用が広がっている。最も西端では大分県にまで使用がある。しかし、三重県より東、北陸地方などに「ハミゴ」の使用は見られない。このことは重要な特徴の一つである。

中国地方の特徴はハネ類が多いことである。しかし、ハミゴ類の拡大に伴い、岡山県・広島県安芸地方・山口県にはまだハネ類の使用は見られるが縮小傾向にある。鳥取県では「ハネコ」は使用され続けている。島根県出雲地方では「ハブ」、鳥取県、広島県の中でも近畿地方に近い備後地方では「ハミゴ」になっている。

東日本に目立ってきた「ハブ」だが、青森県では「ハブ」を認知している人がいたものの、「ハゴ」の使用が目立つ。秋田県は「ハツケ」、宮城県でも「ハツケ」の使用が中年層同様に見られるため、「ハブ」は認知されているが使用は少ない。



図6 少年層の使用状況

少年層（図6）ではさらに一段とハブの使用が広がっている。北海道から沖縄まで使用者が見られる。特に、関東地方全域で盛んに用いられている。興味深いのは愛知県、岐阜県では以前から使用されていた「ハバ」と新しく入ってきたこの「ハブ」が共存した形で使用されていることである。「はぶる」という動詞形があるように、「ハバ」も「はばる」が新しく使用され始めている。

新たにハミゴ類が優勢である近畿地方でも京都府では「ハブ」の使用者が出ている。また、四国地方でも香川県を除き「ハブ」の使用が多くなってきている。特に高知県や愛媛県では、少年層になるとむしろハミゴ類より「ハブ」の方が使用が多い。

九州地方までもハブ類の使用が広がっている。山口県や広島県安芸地方にも「ハブ」の使用が見られる。

一方ハミゴ類は東日本には広がらず、少年層でも、東海や北陸以東では使用が見られない。一方で、島根県や岡山県ではハミゴ類の使用が増加している。特に岡山県での増加は著しく、「ハミ」の使用も多かった。九州では大分県で「ハミゴ」の使用がさらに増え、宮



崎県でも使用する一部の少年層がいた。

問題の東北部地方だが、青森県では老年層等と同様に「ハゴにする」「はごす」の使用が多く、ハブ類は認知されているに留まった。秋田県でも「ハズケ」の使用が多く少年層のハブ類の使用はわずかである。しかし、「ハンツケにする」が使用されていた岩手県では、ハブ類が少年層になると70%の使用率に達する。宮城県では「ハツケ」という言い方は見られず、ハブ類の使用率が20%~60%と若年層に比べ増加傾向にあった。

以上、若い世代には全国的にハブ類が広がっている。ハミゴ類は近畿地方から、主に瀬戸内海域にかけて使用される傾向があり、ハネ類は年齢が下がるにつれ使用地域、使用者が縮小されている。

### 5-2-3 ハミゴ類の使用の多い大阪府の事例

西部方言域に使用者が多く中年層から新しく近畿で使用が始まったハミゴ類について考察を深めていく。ハミゴ類の発生と推定される大阪府の調査は主に大阪市、枚方市で行った。大阪市の出身者が大半を占める。大阪市以外の出身者であっても、大阪市内の学校や職場に通っている人が多かった。調査対象者を次の表に示し、以下に調査結果を図7に示す。

表1 大阪府の調査対象者

世代	男	女	合計
老年層	7	7	14
中年層	9	4	13
若年層	3	8	11
少年層	6	9	15
合計	25	27	53

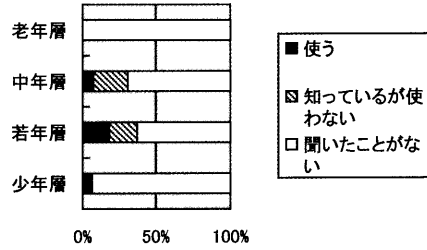


図7 「ハミ」の使用状況【大阪府 (n=53)】<sup>8)</sup>

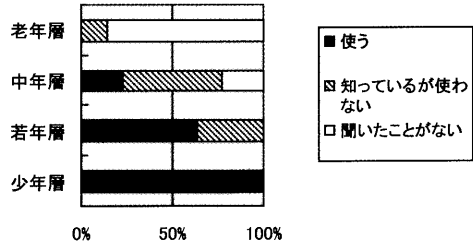


図8 「ハミゴ」の使用状況【大阪府 (n=53)】

「ハミ」は若年層及び中年層と少年層にわずかながら使用が見られた。ただ、使用の多かった若年層についてもその使用率は20%弱であった。老年層では使用も認知も見られなかった。全体的にあまり「ハミ」は使用されていないことが分かる。

「ハミ」とは対照的に「ハミゴ」は、際立って多く使用されていた。大阪府では中年層での使用が見られた。「昔使っていた」(大阪府; 51歳男性)、「中高生時代に使っていた」(大阪府; 50歳代女性)の声が寄せられた。また、「若い人が言う。自分は小学生や中学生だった頃は聞いたことがない」(大阪府; 50歳代男性)という声もあった。老年層での使用が見られなかったことから、50歳代の一部の人が中・高生時代に使い始めたものが広がっていったと考えられる。少年層の場合など使用率は100%であった。「仲間外れにする場面に使う」(大阪府; 10歳代女性)、「冗談で用いる」(大阪府; 10歳代女性)、「持っているものが一人違う」(大阪府; 10歳代男性)などの声があった。「学校で使う」(大阪府; 20歳

代男性)、「クラスの中で浮いている子をさして」(大阪府;10歳代女性)用いるとの声から、学校の話題での使用が多く、学齢期を過ぎた若年層・中年層と年齢が高くなるにつれて使用が減っていくという側面も重なっているかもしれない。

梶村(2005)が香川県においてハミゴ類のアンケート調査を行い、大学生の使用と20歳代教員の使用を比較しているが、20歳代教員では認知率のみ高かった。20歳代教員は「以前は使っていた」という回答が目立ったため、若年層は社会に出ることでその使用が減ることが考えられる。

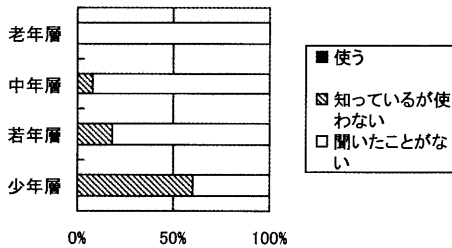


図9 「ハブ」の使用状況【大阪府 (n=53)】

大阪府では、ハブ類に関してどの年齢層に関しても使用者はいなかったが、少年層での認知率は高く、「ハブ」は60%である。老年層では「聞いたことがない」と答えていることから、ハブ類は大阪府には最近伝播してきたようである。少年層・若年層の間でマスメディアや友人の影響で言葉自体は聞いているようである。「ハブは知っているけど使わない」(大阪府;10歳代女性)のように、ハミゴ類を用いハブ類と併用する人は見られなかった。少年層のハブ類の認知の多さからみてもハブ類が「空からばらまかれた伝播」であることが裏付けられる。さらに、図2によりかつてあったはずのハネ類は、使用者・認知者ともにはやいないと見られる。

「仲間外れにする」とハミゴ類ではどちらの言い方がきつく感じますかという問い

に対しては「仲間外れにする」の方がきついとする人が多かった。一方、「仲間外れ」という言い方はしないから分からないという回答もあった。使い始めたきっかけや聞いたのは友人・知人が使用しているからとの声が多かった。また、使い始めた年齢・時期は中学生が最も多い。次に「気づいたら自然に使っていた、覚えていない」(大阪府;10歳代男性)のような回答が多かった。このことから、若者言葉としてではなく、方言としてハミゴ類が使用されていることが分かる。大学生の調査でも大阪府はハミゴ類の使用が多かった。<sup>9)</sup>

#### 5-2-4 ハブ類の使用の静岡県での事例について

調査は静岡県浜松市で行った。調査対象者・調査結果は以下の通りである。

表2 静岡県の調査対象者

世代	男	女	合計
老年層	4	6	10
中年層	2	8	10
若年層	5	5	10
少年層	5	10	15
合計	16	29	45

ハミゴ類、ハネ類はどの世代についても使用者も認知者もいなかった。図3から図6にも示したようにハネ類は使用されておらず、また聞き取り調査において近畿地方などで使われていたハミゴ類は東進していないことが分かる。

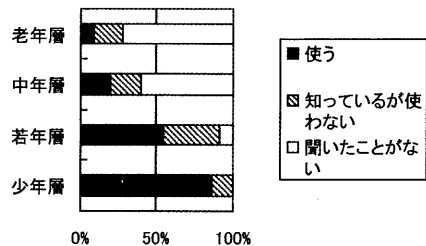


図10 「ハブ」の使用状況【静岡県 (n=45)】

静岡県では『日本国語大辞典第2版』（2001）によるとハブ類の使用が次のように「はぶせ（静岡県静岡市・浜松市）はぶれ（静岡県庵原郡）はぶ（静岡県田方郡・安倍郡）」と書かれている。浜松市の70歳代の女性「『ハブ』を使用する」と答えている。沼津の50歳代の男性も「ハブにする」を使用すると答えていた。辞書の記述にならない浜松市で調査したため、それを裏付けるように中年層・高年層では「ハブセにする」という形が圧倒的に多かった。若年層では「『ハブセにする』も『ハブにする』も聞くことはある」との回答だった。少年層になると「ハブ」の使用率は80%以上となり、若年層でもほとんどの人が知っている言葉であることが分かる。老年層からハブ類を使用する地域でも「ハブコ」という言葉は存在しないとあってよいだろう。

5-2-5 ハネ類の使用の多い岡山県・広島県の事例について

5-2-5-1 岡山県の事例

調査地は岡山市で、老年層10人、中年層10人、若年層19人、少年層10人の調査結果である。

表3 岡山県の調査対象者

世代	男	女	合計
老年層	5	5	10
中年層	1	9	10
若年層	5	14	19
少年層	4	6	10
合計	15	34	49

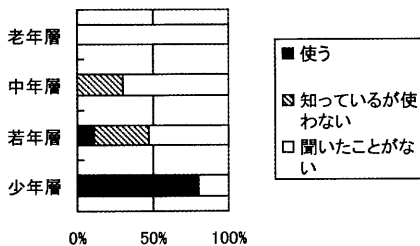


図11 「ハミ」の使用状況【岡山県 (n=49)】

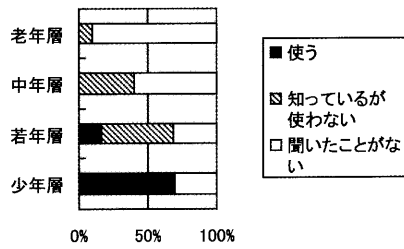


図12 「ハミゴ」の使用状況【岡山県 (n=49)】

「ハミ」の使用は中年層以上では見られない。しかし、中年層では認知率が30%ある。「ハネ」の方は子どもの頃から聞いたことがあったが、「ハミ」の方は大人になってから聞いたような気がする（岡山県；40歳代女性）とあるように、「ハミ」という言葉が後から岡山県で使われるようになったことが窺える。さらに若年層では使用率10%、認知率と合わせると50%近くになり、徐々に岡山県に広がり、少年層になると使用率80%となる。大半の少年層が使っていることが分かる。

近畿地方では「ハミゴ」の使用は多かったが「ハミ」の使用は少なかった。岡山県の少年層の「ハミ」の使用率の高さは、「ハミゴ」や「はみる」などの動詞の省略なのか、または、もともとあった「ハネ」に代わる新しい言葉としての「ハミ」の出現なのか興味深いところである。

「ハミゴ」になると、どの年齢層でも認知している人がいた。中年層では使用者はいないが認知者は40%いる。「最近『ハミゴ』を聞いた。以前は聞いたことがない」（岡山県；40歳代女性）の意見があった。少年層では使用率が高いため、40歳代の人の子ども世代から聞いたものと推測される。若年層の使用率は20%未満だが、認知率は70%近くあり大半の人が「知っている」言葉である。若年層の中でも30歳代での使用者は見られなかった。また、子どもの頃に使用していたという回答も得られなかった。「中学校や高校で使ってい

た」(岡山県;20歳代女性)の声から、20歳代の方が中学生・高校生だった頃に関西や四国から岡山県に広がったのではないと思われる。

梶村(2005)のアンケート調査では、使う13%、聞いたことがある35%だった。少年層になると使用率70%と若年層に比べ急激に使用率が上がっている。「友人同士で使う」(岡山県;10歳代男性)の意見が複数件寄せられ、主に同輩間で使って言葉が広がっているようである。

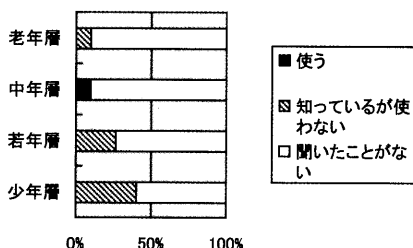


図13 「ハブ」の使用状況【岡山県 (n=49)】

「ハブ」の使用者は中年層で1名いた。他の年齢層で使用者はいなかった。若年層で30%、少年層において40%の認知率があり低いとは言えない。『はみる』や『はねる』は耳にしたことがあるが、『はぶる』ははじめてきく言葉だった」(岡山県;40代際女性)の声からもハブ類は若い世代でも使用されていないことが分かる。「ハブコ」はインフォーマント全員に認知されていない。

中東(2002)は岡山大学をフィールドとした『現代キャンパスことば辞典』を著している。同書にも「ハミゴ」の項目は示されているが、「ハブ」はキャンパスことばとして挙げられていない。「ハブ」の使用が岡山県では少ない様子が窺える。

ハブ類に関して「ドラマの『ライフ』などの中で聞いたような気がする」(岡山県;10歳代女性)の声から友達からというより、マスメディアの影響で言葉が「空からばらまかれ

たような伝播」をしていることが分かる。

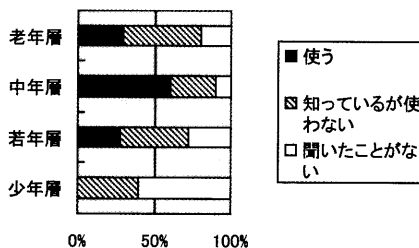


図14 「ハネ」の使用状況【岡山県 (n=49)】

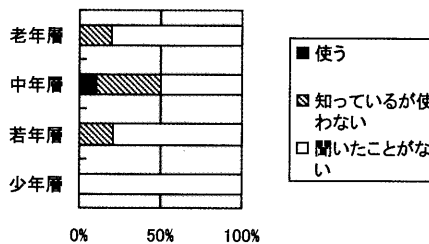


図15 「ハネコ」の使用状況【岡山県 (n=49)】

岡山県ではハネ類の使用が若年層以上であった。老年層で使用率30%、認知率80%と高い。『「ハネにされた」のように使う」(岡山県;75歳男性)の内省からも使用されている実態が窺える。中年層では使用率が最も高く60%であった。認知率と合わせると90%である。「子どもの頃から『ハネ』にすると使う」(岡山県;50歳代女性)との回答も得た。若年層以上では、使用率・認知率ともに高く「ハネ」は70%を超えている。若年層でも使用率30%、認知率と合わせると70%以上と「ハミ」「ハブ」に比べて一番使用率も認知率も高い。『「はねっほ」・「はねっこ」・「はねのけ」なども使う」(岡山県;30歳代女性)の意見もあった。『日国』(2001)や『日本方言大辞典』(1989)にも使用が見られる。少年層では使用者はいないが認知率は40%あった。上の世代が使用しているのを聞いたことがあるのだろう。

『日本方言大辞典』(1989)には岡山県児島郡で「はねご」を使用すると記載してあった

が、今回使用者は中年層1名だった。しかし中年層での認知率は40%と高い。「岡山でも北部の人が使っているような気がする」（岡山県；50歳代女性）との声もあった。鳥取県での使用率が高いことを考えると岡山県北部では使用されることも推測される。少年層では「知っている」と答えた人もいなかったことから、友達や家でも聞くことがないようである。

岡山県ではハネ類は中年層に最も使用者が多く、老年層での認知率も高いという結果であった。また中年層・老年層はハミゴ類、ハブ類は使用者がおらずほとんど認知もされていなかった。しかし、若年層になるとハネ類の他にハミゴ類の使用者もおり、少年層にいたってはハネ類の使用者は全くいなくなる。その代わりにハミゴ類の使用者が急激に増加していた。ハネ類の使用者が今後岡山県で減少していくことが予想される。

5-2-5-2 広島県備後地方の事例

広島県東部の備後地方の調査地は尾道市である。各年層10名の調査結果である。

表4 備後地方の調査対象者

世代	男	女	合計
老年層	3	7	10
中年層	6	4	10
若年層	5	5	10
少年層	5	5	10
合計	18	22	40

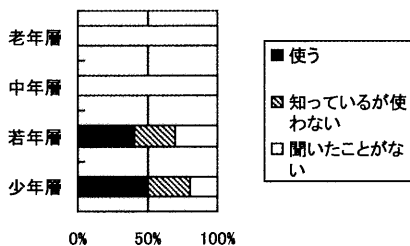


図16 「ハミ」の使用状況【備後地方 (n=40)】

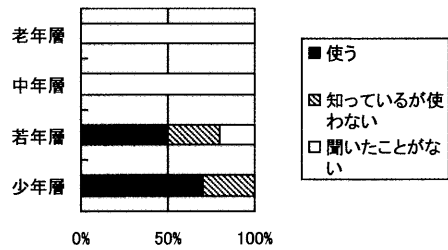


図17 「ハミゴ」の使用状況【備後地方 (n=40)】

「ハミ」は中年層以上には認知もされていないようであるが若年層では40%、少年層では50%の使用率があった。20歳代女性は「『ハミゴ』は使わないし初めて聞いたが、『ハミ』は以前から使っている」と答えている。近畿地方では「ハミ」の使用は少なかったが、中国地方になると岡山や備後地方では「ハミ」の使用が目立つ。

さらに「ハミゴ」も若年層・少年層において使用が見られた。若年層では50%、少年層では70%の使用率があった。「ハミゴ」は中年層・老年層においては全く認知されていない若者語に相当する言葉だった。「いじわるするときに使う」（備後地方;20歳代女性）、「一人ぼっちの人をさしている」（備後地方;10歳代男性）という回答があった。中年層以上では全く使用者はいないが、若年層になるとほとんど若者が知っているため、新しく入ってきた言葉だと考えられる。

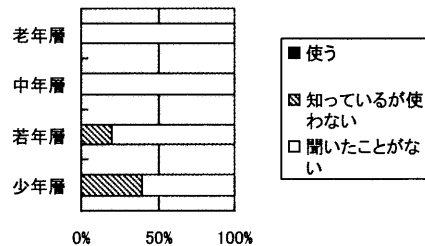


図18 「ハブ」の使用状況【備後地方 (n=40)】

ハブ類の使用者はいなかった。「ハブコ」に関しては認知者もいなかった。少年層では認知率40%あった。広島県西部ではハブ類が使

用されているため、その影響ではないかと考えられる。

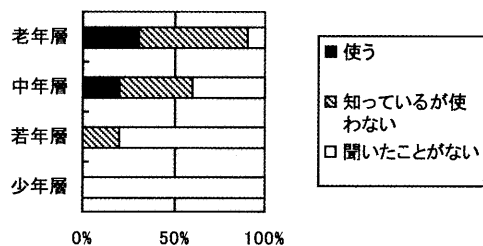


図19 「ハネ」の使用状況【備後地方 (n=40)】

「ハネ」になると中年層以上での使用が見られた。老年層ではほとんどの人が知っている言葉であった。中年層以下では岡山県と比較すると使用されていない。使用率30%、認知率と合わせると90%になる。「学生の頃使っていた」(備後地方; 70歳代男性) などの声があった。中年層になると使用率20%、認知率60%に下がる。若年層では使用者がいなかった。少年層では「聞いたことがない」との回答であった。『日国』(2001)にも広島県での「ハネ」の使用が記述されている。しかし、年齢が下がるにつれ「ハネ」は使用されなくなり、新しく「ハミゴ」を使っている。隣県の岡山県と同様であった。「ハネコ」に関しては認知者もいなかった。

### 5-2-5-3 広島県安芸地方の事例

主な調査地は広島県西部の広島市及び東広島市近辺である。安芸地方と称することとする。

表5 安芸地方の調査対象者

世代	男	女	合計
老年層	5	5	10
中年層	5	5	10
若年層	5	5	10
少年層	3	9	12
合計	18	24	42

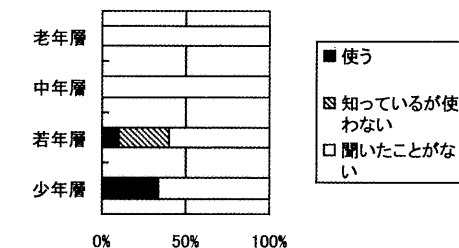


図20 「ハミ」の使用状況【安芸地方 (n=42)】

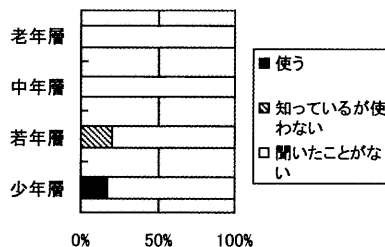


図21 「ハミゴ」の使用状況【安芸地方 (n=42)】

「ハミ」に関して、広島県東部の備後地方では若年層では40%少年層では50%の使用率があったが、安芸地方では若年層10%少年層30%と少ない。「ハミゴ」についても備後地方に比べ使用者が少ない。備後地方では少年層の7割が使用していた。安芸地方になると2割と少ない。しかし、若年層に比べると少年層では使用が増えていることから、今後増加していくことが予想される。

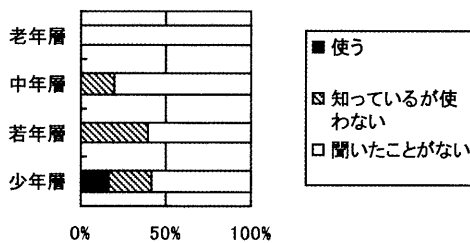


図22 「ハブ」の使用状況【安芸地方 (n=42)】

ハブ類になると、少年層での使用者がいる。名詞の「ハブ」に比べ動詞の「はぶろう」や「はぶる」の方が使用率が高い。「『はぶろう』は自分たちが仲間外れにするときに使う。「ハネ」は『あいつハネにされてない?』のよう

に、傍観者として周りから見るときに使う」(安芸地方;10歳代女性)や「中学生のとき友人は『ハネ』や『ハブ』を使っていた」(安芸地方;10歳代男性)との回答を得た。いずれも少年層の声であるが、「ハネ」と「ハブ」を両方とも使用しているという点では共通している。さらに「『ハブ』はここ一年のうちに初めて聞いた」(安芸地方;40歳代男性)という回答からも、「ハブ」が新しく広島安芸地方で使用されるようになったということが分かる。「ハブコ」に関しては使用者も認知者もいなかった。

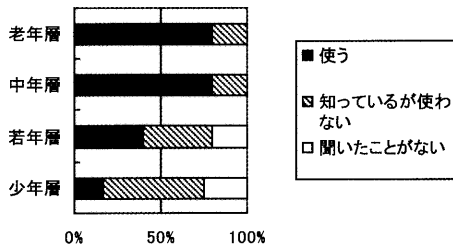


図23 「ハネ」の使用状況【安芸地方 (n=42)】

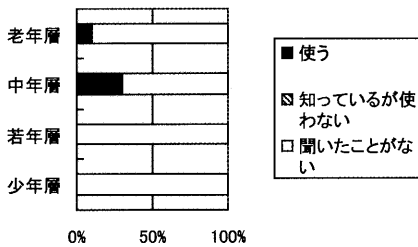


図24 「ハネコ」の使用状況【安芸地方 (n=42)】

安芸地方で最も使用率が高かったのが「ハネ」であった。特に中年層以上では使用率が80%あり、「聞いたことがない」と答えた人がいなかった。備後地方の中年層より使用率が高く、若年層でも使用率40%、少年層は20%未満と年齢が低くなるにつれ使用されなくなる傾向にあったが、いずれも前述の備後地方や岡山県と比べると使用者が多い。どの年齢層においても認知率と合わせると70%を超えていた。

「小さい頃『ハネ』を使っていた(安芸地方;30歳代女性)」や「あの人『ハネ』にしようや。『ハネゴ』ともいう」(安芸地方;50歳代女性)の回答も聞かれた。「ハネゴ」という言葉は「ハネコ」の撥音が入った形で順行同化して「コ」が濁音化しているが、「ハネコ」としてカウントしている。

## 6. まとめ

以上の結果から、調査対象語には伝播の仕方に差が見られる。ハミゴ類は、大阪府や兵庫県の50歳代が最も古い使用層であることから、近畿地方の中心から、若者を中心に「地をばうような伝播」で近畿地方内に広がり、さらに、中国地方や四国地方など西に伝播していった。一方で、東海地方や北陸地方には伝播していないことが明らかとなった。中国地方の伝播は広島県備後地方から次第に安芸地方にも広がりつつある。山口県には、その使用率の低さからみてまだ伝播が到達していないと考えてよいだろう。また、大分県には四国地方から海を渡り広がったものと考えられる。大分県から福岡県に伝播することはなく、南下して宮崎県の方にハミゴ類の動きが見られる。

関西方言の影響力に関して、高橋(2005:285)は「～チャウ」を例に挙げ「東へ向かって拡張していくにあたって、『北陸ルート』よりも『東海ルート』(三重-岐阜)を探るようすが見られる」としている。さらに高橋氏は関西方言が受容されやすい土地を「軟」とし、高橋(2005:289)の中で「『軟化する首都圏、三重-岐阜、岡山・広島・山口』と記述している。その理由として関西方言受容と「都市化」の関係を述べた上で、高橋(2005:290)に「関西弁を大量に耳にするようになったこと」を挙げている。だがハミゴ類に関し

ては首都圏や東海には広がらず、中国地方の一部と四国地方を中心に受け容れられた。加えて四国域から九州の大分域への流れは見落とせない。おそらく、マスコミ等の電波にハミゴ類が乗らなかったことが、都市圏には伝播しなかった要因ではないかと考える。

一方、ハブ類は静岡県で使用されていたものが、神奈川県や東京都で若者言葉として受け容れられたと考える。静岡県では辞典類記述と筆者の調査から古くから使用されていたことが確認されている。また、『現代用語の基礎知識』には若者用語として1986年から示されている。神奈川県などで40歳代の使用者がいることから、1980年代に静岡県から首都圏へ広がったものと考えられる。

井上(2003:57)は「東京型新方言は、東京で採用されて東京から広がる。広域に、速く広がる。マスコミ経路もある。都会では対人接触のチャンスも多いからだろう。これに対し、地方で生まれ、その地方だけで広がるような地方型新方言は、伝播が遅い傾向がある」としている。ハブ類は東京で使用されるようになったために、北海道から九州まで日本全国の若い世代に一気に広がっていったと考える。

1986年に若者語として『現代用語の基礎知識』の登場したハブ類は、1990年代にマスコミや書籍などを通じて、広く日本全国に伝播していったのだろう。

一方、ハミゴ類は新聞記事や小説などに使用されていない。井上(2003:60)は「東京型と地方型の中間ともいえないようなタイプが見つかる。一応『関西型新方言』と名付けておこう」としている。ハミゴ類はこの関西型新方言に分類されるのではないかとと思われる。マスコミの媒体に乗らなかったために、全国に一気に広がることはなかったが、近畿地方から従来の地を這う伝播で西へ西へと広がっ

ていったと考える。

また数多くの方がそうであるように、ハネ類は消滅の危機に瀕している言葉の一つであろう。かつては、広く西日本で使用されていた言葉が、老年層では中国地方のみ使用しており、少年層になると広島県と山口県しか使用者が見られない。図14にも示したように、使用者は減少傾向にあり、少年層では使用率より認知率の方が上回っている。ハネ類は新しく中国地方に広まったハミゴ類やハブ類が若者に受け容れられたことによって使用されなくなってきていると言える。今後、広島県や山口県でもさらにハネ類の使用者は減少していくことが予想される。

ハネ類と同様の縮小現象が各地で見られる。まず、岐阜県愛知県で使用される「ハバ」である。「ハバ」はどの世代にも使用されており、「ハバ」を「聞いたことがない」と答えた人がいなかった。その岐阜県や愛知県でも若年層や少年層の一部にハブ類の使用が見られはじめ、少年層になるにつれ増加傾向にある。永瀬(1994:114)で「ハッケは仙台の新方言と関係するかもしれない」としている。筆者の調査でも確かに老年層では使用者はいなかったが、少年層でも使用は見られなかった。中年層や若年層で使用されていたことから新方言として今後根付くのは難しいのではないか。

もう一つ青森県の「ハゴにする」や秋田県の「ハヅケ」は使用地域は少ないが、多くの若い世代にも使用され続けているため、今後しばらくは消滅することはなさそうである。

「仲間外れ」を表わす言葉の対義語として「仲間入れ」を表わす言葉がある。例えば「よして」「よせて」といった言葉は、主に近畿地方から中国・四国地方にかけて、老年層から少年層にどの年層にも使用が見られる。「かでて」「かてて」は主に東北部と九州北



部で使用があり、若い世代にも用いられている。また東北と九州といった離れた地域での使用であるため、方言圏論として解釈が考えられる分布である。篠崎（1994）は「仲間入れ」の言葉を「気づかない方言」と表しているように、方言と気づかないままに使用していることも「仲間外れ」の言葉に比べ「仲間入れ」は言語変化の遅い一因だと考えるが、

室山（2001：11）が「ほめことば（プラス評価語彙）よりもけなしことば（マイナス評価語彙）の方がはるかに多く認められる」と述べているように、対人関係語彙の問題も無視できない。今後は、「仲間入れ」の言葉の使用状況を分析し、「仲間外れ」を表わす言葉との伝播差について比較検討していきたい。

## 【注】

<sup>1)</sup>「伝播」の種類用語は、徳川宗賢他編『新・方言学を学ぶ人のために』に順ずる。

<sup>2)</sup>「ハミ」「ハミゴ」等を総称してハミゴ類と表記する。ハブ類、ハネ類も前に同じ。また名詞はカタカナ、動詞は平仮名で表記する。

<sup>3)</sup>宝暦から安永にかけて上方で活躍した江戸中期の歌舞伎界を代表する狂言作者。享保15年（1730年）に大坂道頓堀で生を受けた正三は、幼名を久太と言ひ、家業が芝居茶屋であったこともあり歌舞伎や操り芝居の楽屋を遊び場として成長した。

<sup>4)</sup>梶村（2005）ではハミゴ類に関してのみアンケート調査を行っている。アンケートの項目は、名詞形・五段動詞の辞書形・マス形・テ形・タ形・ナイ形・タラ形・バ形・意志形、それに「はみごる」「はみごする」の動詞を含む全14項目である。10名以上の出身者のアンケートが回収できた地域は、東京・三重・大阪・兵庫・島根・岡山・広島・山口・徳島・香川・愛媛・高知・福岡・長崎・熊本・大分・宮崎であった。その結果、香川県で最も多く使用されており、四国・近畿地方で主に用いられていた。使用者層はどの地域でも20歳未満が多かった。特に多かった香川県では男女別・若年層と30歳代以上の教師という年代別での分析も行った。男女別では女性の方が多く用い、年代別では若者の6割が使用している言葉でも、教師の側はほとんど知らない言葉だと分かった。アンケートの自由記述欄にも「以前は使っていたが今は使わない」のような記述も複数あり、ハミゴ類は学校に通う者が主に使用する生徒方言の性格が強いものとなったと言える。

<sup>5)</sup>方言でおしゃべりしたり、地元の話題を楽しめるサイト（<http://hougen.atok.com/>）「方言WEBほべりぐ」を用いた。方言に興味を持っている人が集まるサイトであるからである。「ハミゴ」や「ハブ」の使用の有無や、仲間外れにすることまたされることを何と言うかについて質問している。ただし、年齢や性別、本当にその人がその地域の出身なのか

は断定できないのが難点である。

<sup>6)</sup>陣内正敬（1993）では、方言話者を老年層（60歳以上）、中年層（40歳～59歳）、若年層（20歳～39歳）、少年層（10歳～19歳）とし、それぞれ男女5名ずつ、計40人で調査している。本稿でもこれに習い、各年層10名以上を目指し、なるべく男女の偏りがないようにつとめた。個人情報保護法の制定に伴い、本調査項目に直接関係のない対象者の属性・社会的地位などはプライバシー保護の観点から取って聞くことを控えた。

<sup>7)</sup>2007年7月に山口大学でアンケート調査を行ったものである。調査項目は聞き取り調査と同一である。広島県ではハミゴ類、ハブ類、ハネ類すべての項目で使用者がいたため、旧国である備後と安芸に分けて集計を行った。

備後地方の学生21名の結果である。「ハミゴ」の使用が最も多く90%近く使用がある。1名「聞いたことがない」と答えた他は、認知されている言葉であった。「ハミ」は30%の使用率で認知率と合わせると50%を超える。「ハブ」の使用者はいなかった。認知率は約50%と高い。「ハネ」・「ハネコ」はそれぞれ1名使用者がいた。「ハネ」は認知率と合わせると3割に達する。備後地方ではハミゴ類が多く用いられていることが分かる。

安芸地方は43名の結果である。備後地方に比べ、ハミゴ類の使用が全体的に少ない。特に備後地方で80%以上の使用率だった「ハミゴ」は安芸地方では30%程度である。「ハミ」の使用率は20%未満である。「ハブ」の使用者は20%近くおり、認知率と合わせると50%程度である。「ハネ」の使用は備後地方に比べて多く30%近く使用率があった。認知率と合わせると過半数を超える。「ハネコ」の使用者は1名のみであった。

備後地方のハミゴ類は突出して多いのに比べ、安芸地方ではハミゴ類、ハブ類、ハネ類の使用率が同程度であったことから、分けて分析することとする。

<sup>8)</sup> 「n」は調査対象者の合計人数を表している。  
<sup>9)</sup> 聞き取り調査では各年層10名程度であるため、1名の使用の有無で使用率が揺れることも危惧される。そこで、聞き取り調査と同時期に同じ質問票を用いて大学生に調査を行った。アンケート結果を示すことでより聞き取り調査のデータを裏付けるものとした。例を示すと大阪府では46名の大学生調査結果だが、「ハミゴ」は使用率が50%で「聞いたことがない」と答えた学生は1名であった。聞き取り調査の結果でも大阪府の若年層全員が使用または認知語彙である。したがって聞き取り調査の結果と極端な差はないと考えている。

## 【引用文献】

- 井上史雄 (2003) 『日本語は年速一キロで動く』 講談社現代新書  
江国香織 (1997) 『いじめの時間』 新潮文庫『現代用語の基礎知識』 自由国民社  
重松清 (1997) 『ナイフ』 新潮社  
篠崎晃一 (1994) 「気づかない方言と新しい地域差」 『言語』 大修館書店 第23巻第6号 p71  
陣内正敬 (1993) 『地方中核都市方言調査報告－福岡市・北九州市』 九州大学言語文化部日本語科発行  
相村知美 (2005) 「『はみご類』の社会言語学的考察」 山口大学大学院教育学研究科修士論文  
住田正樹 (2001) 「現代社会の変容と子どもの仲間集団」 『地域社会と教育－子どもの発達と地域社会－』 九州大学出版会 pp.82-125  
高橋顕志 (2005) 「これからの関西方言の広がり－全国大学生アンケートより－」 『関西方言の広がりコミュニケーションの行方』 和泉書院 pp.279-291  
田中理恵 (2002) 住田正樹・高島秀樹編著 『子どもの発達と現代社会・教育社会学講義』 北樹出版 pp.65-75

- 徳川宗賢他編 (1989) 『日本方言大辞典』 小学館  
永瀬治郎 (1994) 「キャンパスことば全国分布図」 『言語』 大修館 23巻6月号 p114  
中東靖恵 (2002) 『現代キャンパスことば辞典－岡山大学編－』 吉備人出版 p228  
郡史郎編 (1997) 『大阪府のことば』 明治書院  
藤原和博 (2006.11) 「公立校再建なくして国栄えず」 『文藝春秋』 文藝春秋社  
松井栄一編 (2001) 『日本国語大辞典』 小学館  
室山敏昭 (2001) 「『ヨコ』社会の構造と意味－方言性向語彙に見る－」 和泉書院  
米川明彦 (1996) 『現代若者ことば考』 丸善ライブラリー

## 【引用サイト】

- 高橋顕志 (1990) 「四国言語地図 ハミゴ」 (<http://kenz.linguistic-atlas.org/shiko/90s299.htm>) に調査項目は示してあるが、提供期間終了のため本人所蔵の分布図を賜った。  
高橋顕志 (2001-2005) 「西日本言語地図 (2001-2005) ハネ」 <http://kenz.linguistic-atlas.org/nishi/index.html>

## 【参考文献】

- 井上史雄 (2008) 『社会方言学論考－新方言の基盤一』 明治書院  
中田祝夫他編 (1983) 『古語大辞典』 小学館

## 謝辞

本稿執筆にあたり、添田建治郎先生をはじめ、査読の先生方から有益なコメントをいただきました。記して感謝申し上げます。また、調査にご協力いただいた各地のインフォーマントの皆様にお礼申し上げます。

## 添付資料1

## 言葉に関するアンケート

以下に示す「仲間外れにする」言葉について、使用地域、また使用者の年齢を調べています。1～12の文中の下線部に対して当てはまる記号に丸を付けてください。「ハミゴ」類、「ハブ」類、「ハネ」類どれも使わないが、別の言い方をする場合は自由記述欄に記述をお願いします。

例 ゲームの話題について行けず、はみってしまった。

(A) 使う B. 知っているが使わない C. 聞いたことがない

## ①【ハミゴ類】

1. 私をハミにしている3人のうち1人が、最近部活を辞めると言い出した。  
A. 使う B. 知っているが使わない C. 聞いたことがない
2. 仲良かった友達のグループからハミゴにされた。  
A. 使う B. 知っているが使わない C. 聞いたことがない
3. グループの人たちが花子を無視して花子をはみろうとしていた。  
A. 使う B. 知っているが使わない C. 聞いたことがない
4. 二人組を作るとき、奇数だったら絶対一人ははみるじゃん。  
A. 使う B. 知っているが使わない C. 聞いたことがない

## ②【ハブ類】

5. 私をハブにしている3人のうち1人が、最近部活を辞めると言い出した。  
A. 使う B. 知っているが使わない C. 聞いたことがない
6. 仲良かった友達のグループからハブコにされた。  
A. 使う B. 知っているが使わない C. 聞いたことがない
7. グループの人たちが花子を無視して花子をはぶろうとしていた。  
A. 使う B. 知っているが使わない C. 聞いたことがない
8. 二人組を作るとき、奇数だったら絶対一人ははぶるじゃん。  
A. 使う B. 知っているが使わない C. 聞いたことがない

## ③【ハネ類】

9. 私をハネにしている3人のうち1人が、最近部活を辞めると言い出した。  
A. 使う B. 知っているが使わない C. 聞いたことがない
10. 仲良かった友達のグループからハネコにされた。  
A. 使う B. 知っているが使わない C. 聞いたことがない
11. グループの人たちが花子を無視して花子をはねようとしていた。  
A. 使う B. 知っているが使わない C. 聞いたことがない
12. 二人組を作るとき、奇数だったら絶対一人ははねるじゃん。  
A. 使う B. 知っているが使わない C. 聞いたことがない

全体を通して何かご意見があればご記入下さい。

-----  
-----  
-----

◎生育地<出身地> ( ) 都道府県 ( ) 市町村 ◎性別 (男・女)

◎年齢 (10歳代・20歳代・30歳代・40歳代・50歳代・60歳代・70歳代～)

## 添付資料2

表6：聞き取り調査対象者

(人)

北海道		青森県		岩手県		秋田県		山形県		宮城県	
老年層	10	老年層	10	老年層	10	老年層	10	老年層	10	老年層	10
中年層	10	中年層	10	中年層	10	中年層	10	中年層	10	中年層	10
若年層	10	若年層	10	若年層	10	若年層	10	若年層	10	若年層	10
少年層	10	少年層	10	少年層	10	少年層	10	少年層	10	少年層	10
福島県		茨城県		栃木県		群馬県		埼玉県		千葉県	
老年層	10	老年層	10	老年層	10	老年層	10	老年層	10	老年層	10
中年層	10	中年層	10	中年層	10	中年層	10	中年層	10	中年層	10
若年層	10	若年層	10	若年層	10	若年層	10	若年層	10	若年層	10
少年層	10	少年層	10	少年層	10	少年層	12	少年層	10	少年層	10
東京都		神奈川県		新潟県		富山県		石川県		福井県	
老年層	10	老年層	10	老年層	10	老年層	10	老年層	10	老年層	10
中年層	10	中年層	10	中年層	10	中年層	10	中年層	10	中年層	10
若年層	10	若年層	10	若年層	10	若年層	10	若年層	10	若年層	10
少年層	10	少年層	10	少年層	10	少年層	12	少年層	10	少年層	10
山梨県		長野県		岐阜県		静岡県		愛知県		三重県	
老年層	10	老年層	10	老年層	10	老年層	10	老年層	10	老年層	10
中年層	10	中年層	10	中年層	10	中年層	10	中年層	10	中年層	10
若年層	10	若年層	10	若年層	10	若年層	10	若年層	10	若年層	10
少年層	10	少年層	10	少年層	10	少年層	15	少年層	10	少年層	10
滋賀県		京都府		大阪府		兵庫県		奈良県		和歌山県	
老年層	10	老年層	10	老年層	14	老年層	10	老年層	10	老年層	10
中年層	10	中年層	13	中年層	13	中年層	10	中年層	11	中年層	10
若年層	10	若年層	18	若年層	11	若年層	10	若年層	10	若年層	13
少年層	10	少年層	10	少年層	15	少年層	10	少年層	10	少年層	10
鳥取県		島根県（出雲）		島根県（石見）		岡山県		広島県（備後）		広島県（安芸）	
老年層	10	老年層	10	老年層	10	老年層	10	老年層	10	老年層	10
中年層	11	中年層	10	中年層	10	中年層	10	中年層	10	中年層	10
若年層	13	若年層	24	若年層	10	若年層	19	若年層	10	若年層	10
少年層	10	少年層	10	少年層	10	少年層	10	少年層	10	少年層	12
山口県		徳島県		香川県		愛媛県		高知県		福岡県	
老年層	33	老年層	11	老年層	10	老年層	10	老年層	10	老年層	13
中年層	64	中年層	10	中年層	10	中年層	10	中年層	11	中年層	15
若年層	44	若年層	10	若年層	12	若年層	10	若年層	12	若年層	14
少年層	21	少年層	10	少年層	15	少年層	11	少年層	10	少年層	11
佐賀県		長崎県		熊本県		大分県		宮崎県		鹿児島県	
老年層	10	老年層	10	老年層	10	老年層	10	老年層	10	老年層	10
中年層	10	中年層	10	中年層	11	中年層	10	中年層	10	中年層	10
若年層	10	若年層	10	若年層	11	若年層	25	若年層	10	若年層	10
少年層	10	少年層	10	少年層	12	少年層	11	少年層	11	少年層	10
沖縄県											
老年層	10										
中年層	10										
若年層	10										
少年層	10										